

## 「福音の力」

2018年08月23日

ローマの信徒への手紙1章16節～17節 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

パウロは、ローマ帝国の都・ローマにある教会を訪問したいと熱望していた。訪問の目的は、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいことと、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があるので、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたい、この二つであった。福音宣教に命を賭していたパウロにとって、最大の都・ローマでの宣教は夢であっただろう。パウロは、ローマ教会に宛てた手紙の最初に、訪問の熱望を書いて、愛と親しみを認めている。

続いてパウロは、宣教しているキリストの福音が何であるか、その福音の力はどのようなものであるか、これから書く福音の内実を短い言葉で要約して著している。ローマ書は、上記の2節で言い表していると言えよう。まず、パウロは、「わたしは福音を恥としない」と言っている。「恥としない」とは誇りにしているという意味で、パウロは、キリストの福音を何よりの誇りとし、福音に全身を委ね、福音宣教に生涯をかけていた。しかし、「恥としない」という言葉には、福音には「恥」とすべき面があることを認識しているということである。Iコリント書1章18節で「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」と書いている。十字架刑はローマ帝国に反逆した者に科せられた刑罰で、犯罪人として、残虐に殺される敗北者の最後の姿である。栄光の神を求めるユダヤ人には十字架は「弱さ、恥」であった。ファリサイ派の学徒として、栄光の神を求めていたパウロにとって、十字架は恥以外の何ものでもなかった。しかし、主イエスの十字架の死と復活を信じて、救われる者には「神の力」であった。だから、「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」と言うのである。「神の力」とは、ギリシア世界では人間の力を越えた奇跡的な力を意味し、ユダヤ教では世界史の中で働く神の救済の業を指している。パウロは、キリストの十字架が福音であり、その福音は救いをもたらす「神の力」であると、喜びと誇りを持って受け止めたのである。

次にパウロは、「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」と説明している。キリストの福音には「神の義」が啓示されている。「義」は元来、法廷用語で「無罪放免」という意味である。神は人間を救うご自身の契約に誠実で、神に敵対する人間の罪を断罪して、救いの契約を破棄することをせず、信じる者を無条件で赦し、「義」なる者と認め、神と結び合う関係に招き入れられた。即ち、神との正しい関係への回復、義を意味している。この「義」はキリストの十字架を信じる信仰を通して実現する。信仰と訳されているギリシア語は「ピスティス」という言葉で、神が主語の場合は「真実、誠実」を意味し、人間が主語の場合は「信仰、信頼」を指す。神の「真実」を現わされた十字架によって罪が赦され、神と正しく結び合う「義」が与えられるというのがパウロの福音理解である。従って、神の真実に信頼する者が「神の義」に与り、「正しい者」として生かされるのである。